第１２回幼児教育実践学会
口頭発表Ⅰ-4

保育者・園長が主体的に学び続けるための
研修・研究・評価への取り組みについて
～学びを止めない～

【研究チーム（教育研究所）編】

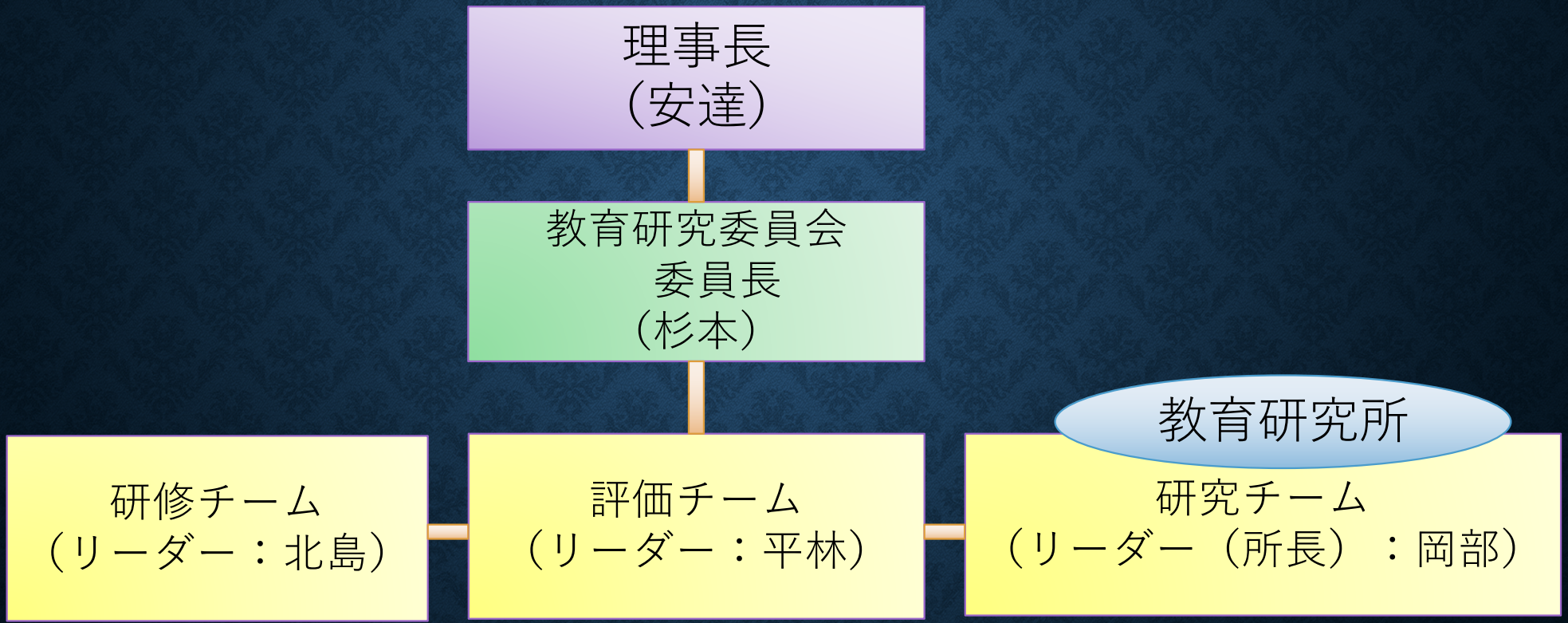
発表者：岡部祐輝

幼稚園型認定こども園高槻双葉幼稚園　教頭

（一社）大阪府私立幼稚園連盟　教育研究委員会　副委員長

同連盟　教育研究所　　所長

（一社）大阪府私立幼稚園連盟　教育研究委員会　組織概要



研究チーム（教育研究所）とは

（目的）～教育研究所　規約第３条～

「本研究所は、保育実践を踏まえた幼児教育の本質及び時代に即応した調査研究を深め、併せて保育実践の研修と教員の資質向上に寄与することを目的とする」

（事業）～教育研究所　規約第４条～

（１）幼児教育に関する調査研究

（２）幼児教育に関する図書及び印刷物の刊行

（３）幼児教育に関する資料の収集と配布

（４）その他研究所の目的を達成するための必要な事業

主な活動の展開の仕方として

①教育研究所で、複数年にわたる「研究プロジェクト」を企画・立案する。

②企画・立案したテーマに応じて指導助言をいただける先生に、指導助言依頼を行う。

③研究プロジェクト内容と指導助言の先生が決まったのちに、連盟加盟園約４２０園に対

して、研究プロジェクトメンバーを募集する。（＊定員設定あり）

④研究プロジェクトメンバーの応募・メンバー選定を経て、初回例会がスタートする。

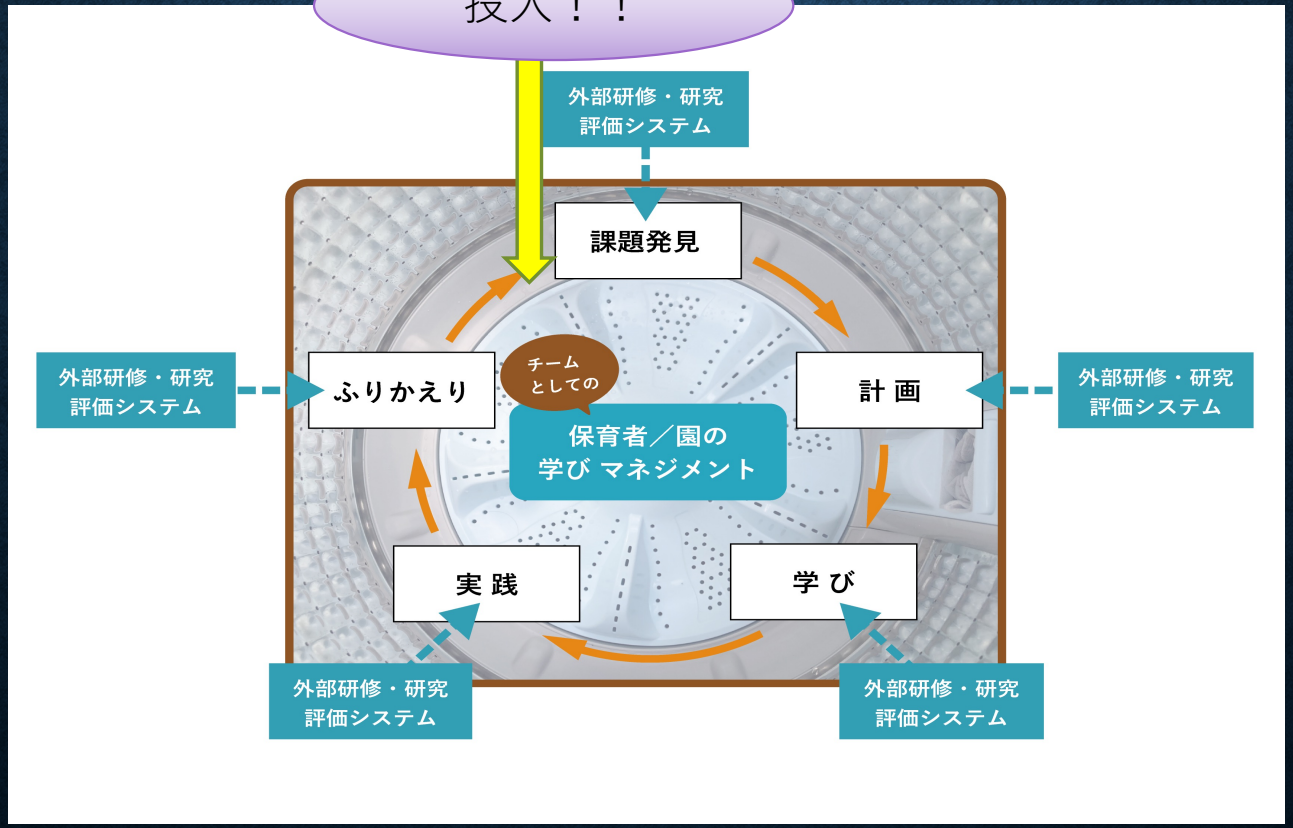
⑤複数年（多くは２年間）にわたり、おおむね月１回の例会を大阪私学会館で行う。

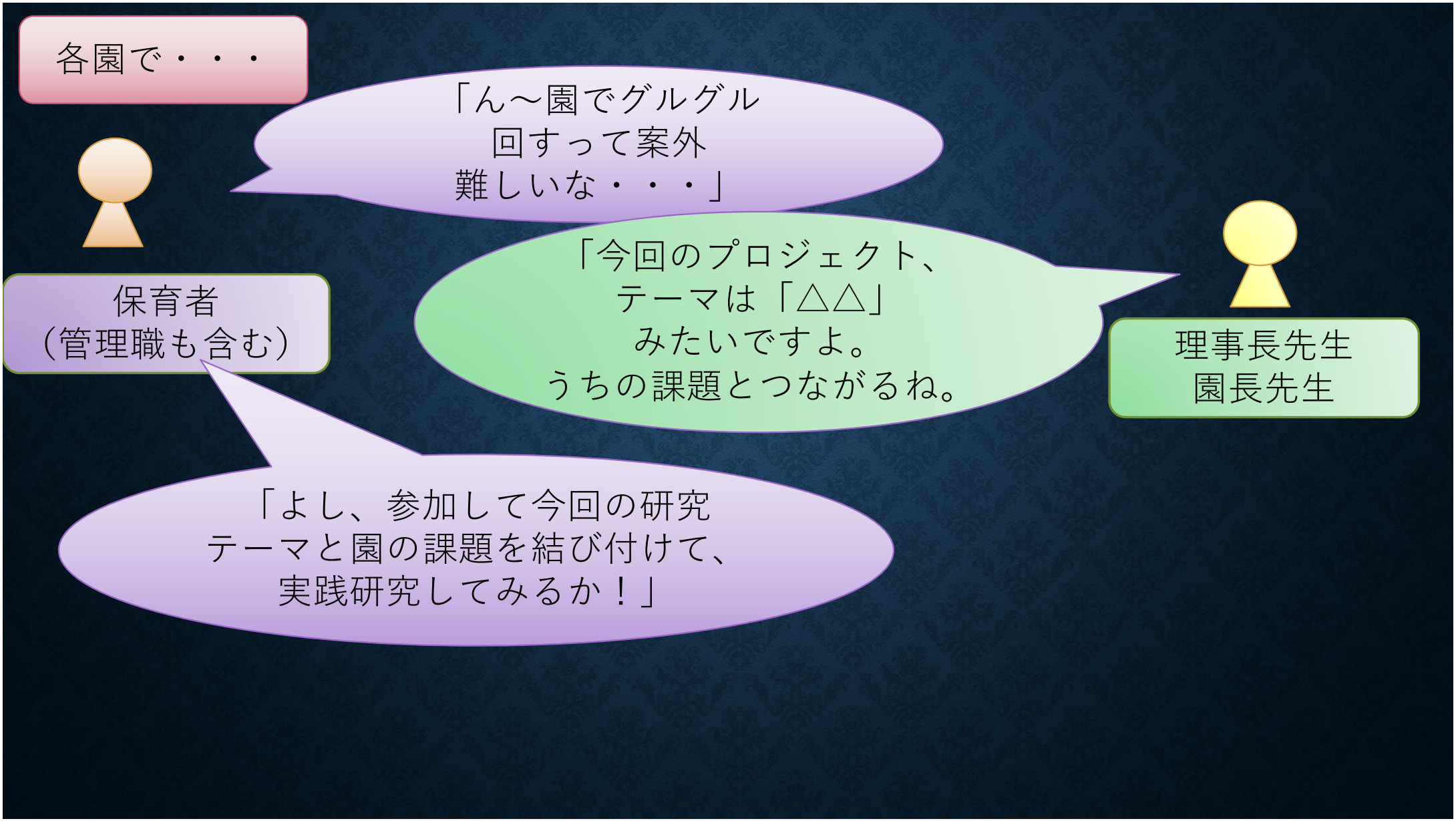
（＊プロジェクトによりフィールドワークが入る場合もあり）

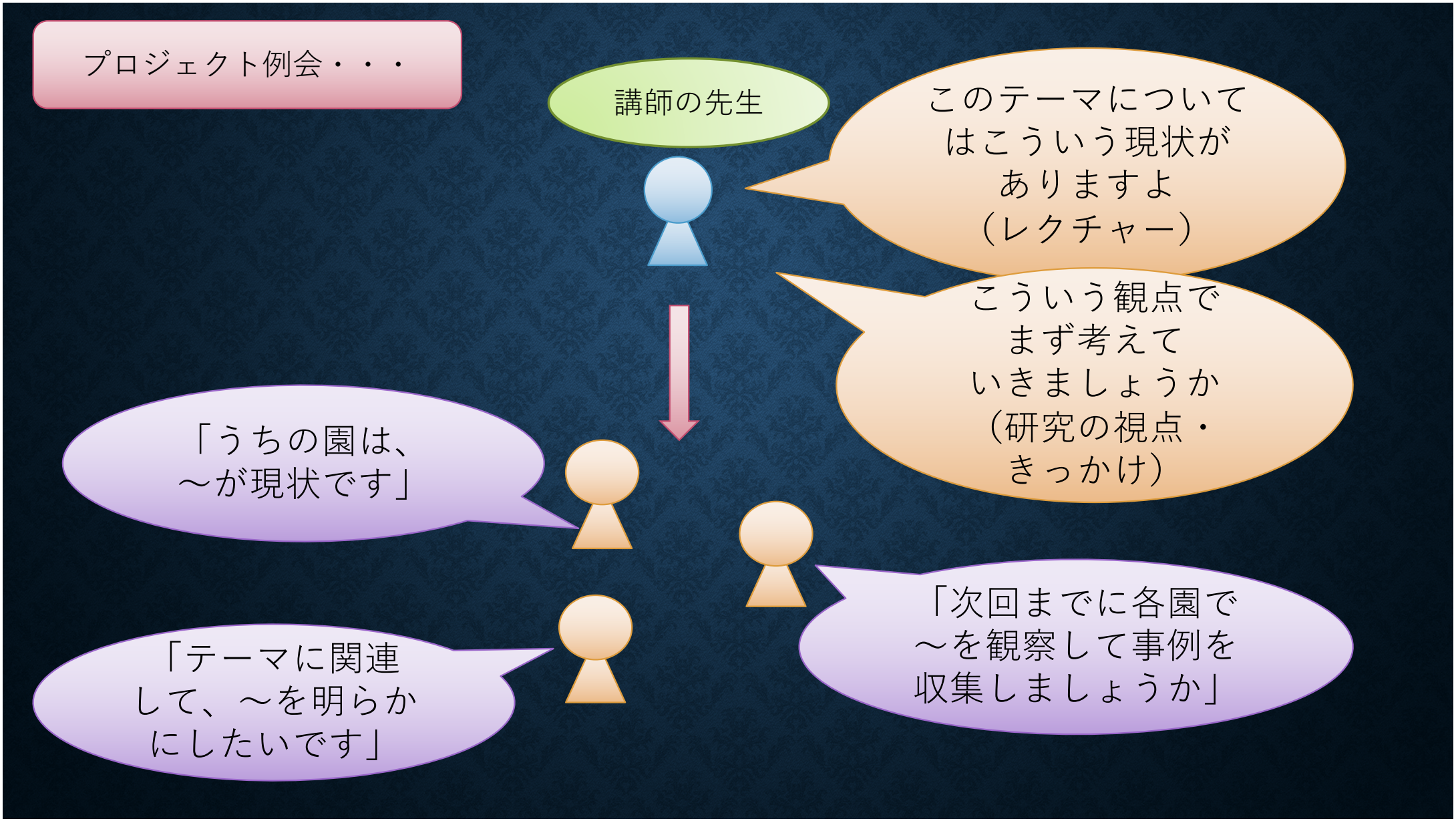
グルグルと研究の関連・・・

研究大テーマ：連盟/教育研究所で設定

投入！！




各園で・・・
「ん～園でグルグル
回すって案外
難しいな・・・」
保育者
（管理職も含む）
「今回のプロジェクト、
テーマは「△△」
みたいですよ。
うちの課題とつながるね。
理事長先生
園長先生
「よし、参加して今回の研究
テーマと園の課題を結び付けて、
実践研究してみるか！」


プロジェクト例会・・・
講師の先生
このテーマについて
はこういう現状が
ありますよ
（レクチャー）
こういう観点で
まず考えて
いきましょうか
（研究の視点・
きっかけ）
「うちの園は、
～が現状です」
「テーマに関連
して、～を明らか
にしたいです」
「次回までに各園で
～を観察して事例を
収集しましょうか」

再び各園で・・・

「プロジェクトの学び、
共有すると・・・」

「今、この観点で実践研究
しているので、～の事例、
収集しますね」

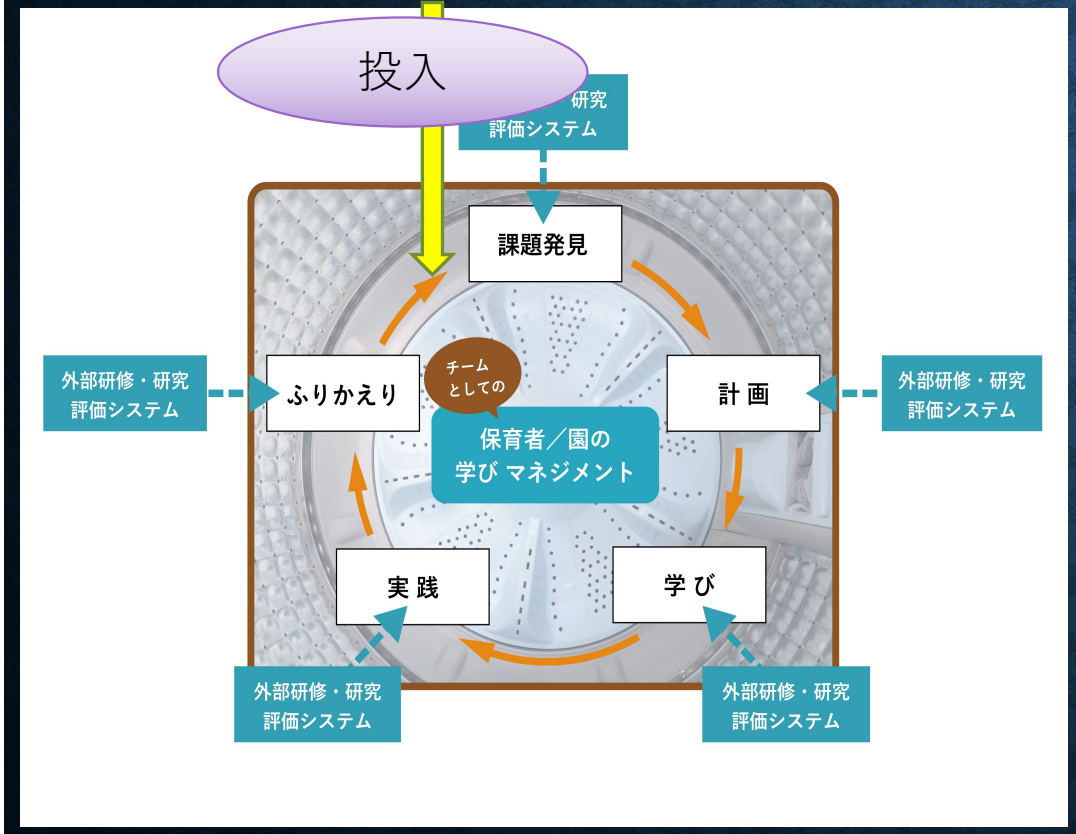
「園のドキュメンテーション、
次回の例会で持ち寄っても
いいですか？」

次の例会へ

各園それぞれで、研究テーマの視点に関する事例の観察や、
関連する園の成果物を収集する。

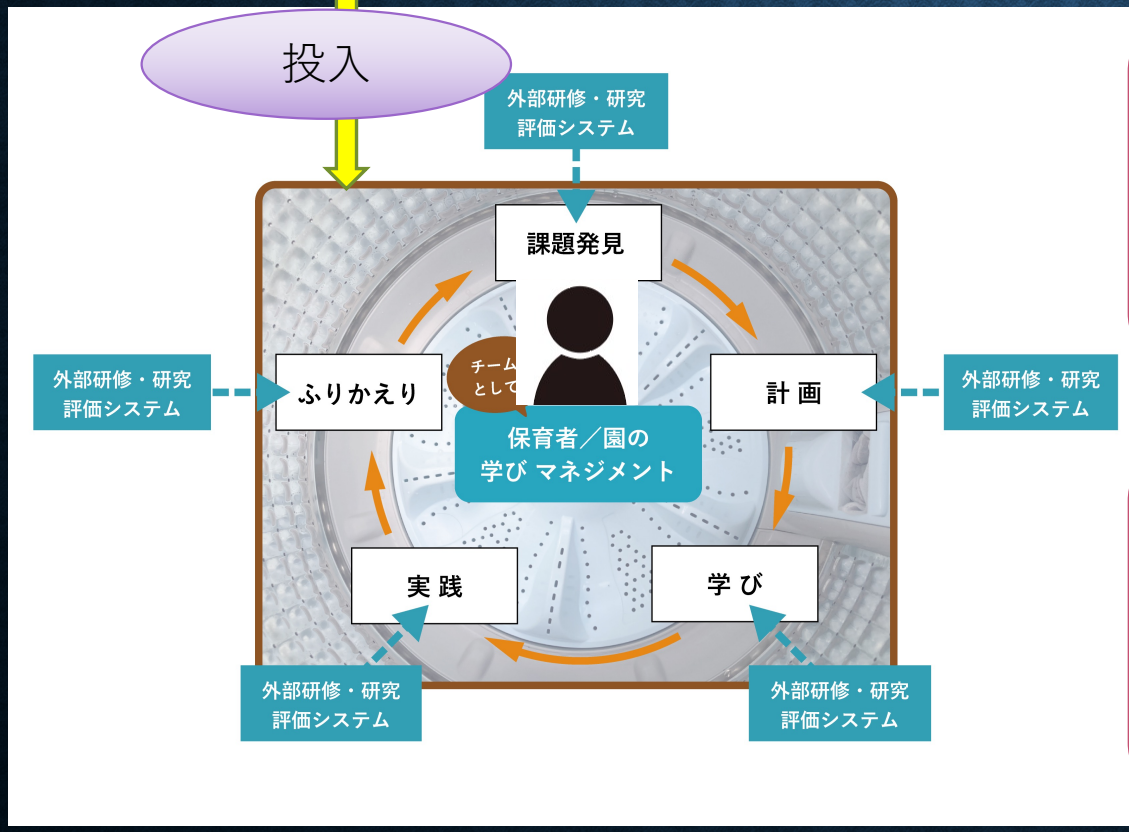
グルグルと研究の関連・・・

研究大テーマ：連盟/教育研究所で設定



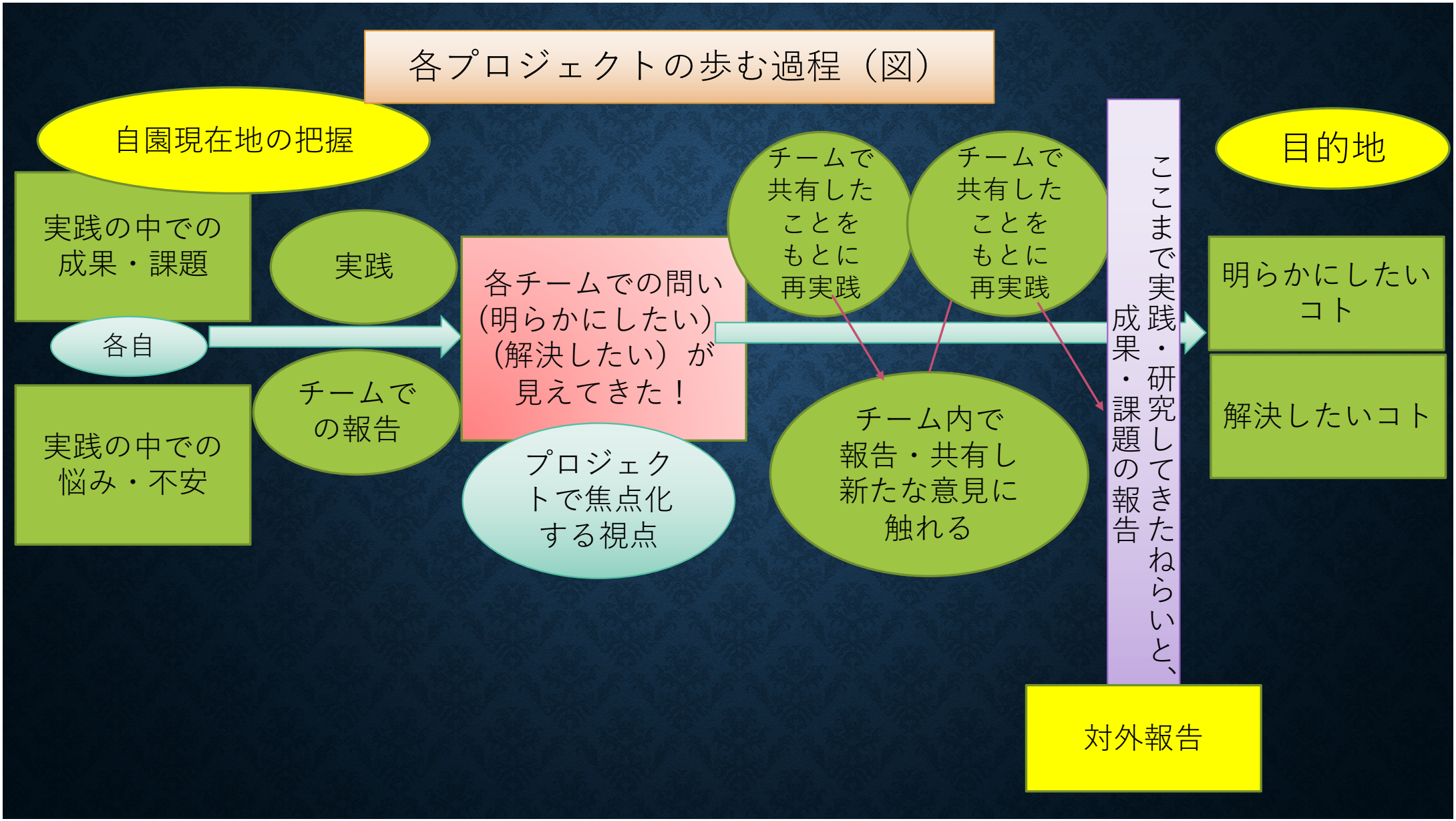
11回/年×２年間（＊２６次は６年間）

研究大テーマ：連盟/教育研究所で設定



プロジェクトメンバーが大テーマのもと、講師の先生の助言などを踏まえ、課題に気づき、計画を立て実践。実践したことを、次の例会で討議し、また計画する。

園外で園外の保育者同士で「ぐるぐる」を範囲が広い中で回し、そこで会得した「ぐるぐる回しの方法」を、各園で生かす。


各プロジェクトの歩む過程（図）
自園現在地の把握
実践の中での成果・課題
各自
実践の中での悩み・不安
実践
チームでの報告
各チームでの問い（明らかにしたい）（解決したい）が見えてきた！
プロジェクトで焦点化する視点
チームで共有したことをもとに再実践
チームで共有したことをもとに再実践
チーム内で報告・共有し新たな意見に触れる
ここまで実践・研究してきたねらいと、成果・課題の報告
対外報告
目的地
明らかにしたいコト
解決したいコト

研究プロジェクトを行う良さとして

【参加メンバー・園にとっての益】

□理論と実践の往復を通した学びをすることにより、実践を俯瞰的にとらえたり、構造化/顕在化　することが

　できる。

□他園の実践事例や考えを聞くことができ、自園でやってみようと思う素材・事例と出合うことが

　できる。

□自園の実践を振り返り、プロジェクトで検討し、そこに新たな要素を含めることで、取り組み内

例会においてメンバー自身の気づき、他園の実践をインプット

↓

自園での実践に生かす/自園で学びを広める

↓

次月の例会で自園の実践をアウトプット⇒インプット

連盟で研究プロジェクトを行う良さとして

【連盟加盟園全体にとっての益】

□各園の実践の結果だけではなく、その取り組んでいた過程とともに結果をとらえる

　ことができる。

□教育研究所から刊行される研究紀要で、学びの還元を受けることができる。

（同様に研修大会/研究大会での発表も、加盟園への還元である）

□これから、新たな保育実践に取り組もうとする園の一つのモデルとして、プロジェ

クトの実践が生かされる。

現在進行中のプロジェクト（令和３年７月現在）

～第２６次プロジェクト～（２０１６．４～２０２２．３）

「0歳児から6歳児までの保育・教育を考える」～非認知的能力はどのようにして育まれるのか～」

コーディネーター：神戸大学大学院人間発達環境学研究科　准教授　北野幸子先生

【プロジェクトの概要】

＊０歳児～６歳児の事例を収集し、その中から非認知的能力の育ちをメンバー間で協議・解釈し、環境や人間関

係の中で育っていると考えられることを、まとめる。（可視化・記録も含む）

＊卒園生アンケートや小学生へのアンケートなどを通して、乳幼児期の非認知的能力の育ちが、その後どのように影響しているか、縦断研究的な視点を持ち、調査を行う。

＊可視化の後の効果（保護者への発信やその後の保護者の行動変容）などについても明らかにする。

ちょっとお知らせ☕

こちらにこれまでの研究の歩みや事例が
掲載されています！

著者：北野幸子・大阪府私立幼稚園連盟
第２６次プロジェクトメンバー
「子どもと保育者でつくる育ちの記録」
～あそびの中の育ちを可視化する～」
（株）日本標準

現在進行中のプロジェクト（令和３年７月現在）

～第２８次プロジェクト～（２０１９.４～２０２１．７）　（＊コロナ禍の影響を受けて期間延長）

「5歳児保育の本当に大切なこと」～保護者・地域・小学校との連携の中で～」

講師：兵庫教育大学大学院　小学校教員養成特別コース　准教授　鈴木正敏先生

【プロジェクトの概要】

＊5歳児の育ちを、「資質・能力」、「縦と横（異年齢と同学年）」、「伝える」の3つの観点から、実践研究を行う。

＊「資質・能力」：資質・能力の育ちを教育要領なども踏まえ、実践の計画と振り返りを行う

＊「縦と横」：縦割りと横割りのそれぞれの保育の良さを考える

＊「伝える」：子どもの育ちをどのように保護者や小学校に発信し、伝えていくかを考える

現在進行中のプロジェクト（令和３年７月現在）

～第２９次プロジェクト～（2020.9～2022.　7）

「子どもの育ちを喜び合う記録の開発と検討」～子どもや保護者と共有するための可視化や発信～

講師：香川大学　教育学部　学校教育教員養成課程　准教授　松井剛太先生

【プロジェクトの概要】

＊幼児期の「子どもの姿」や「見えにくい育ち」とされることに対し、「記録」、「可視化」、「発信」が重要となるこ

とを踏まえ、各園で実践を行い、その効果や変容を検証する。

＊記録・可視化・発信がいかに、「子ども」、「保護者」、「保育者」と関連があるか、関連させるとよいかについ

ても検証する。

各プロジェクトで行う活動として

＊月1回（8月除く）の例会実施

＊研究発表や研修大会での発表（主に近畿地区と大阪での発表）

＊研究紀要の発刊（プロジェクトの研究集大成として）

△その他学会への参加

△上記以外の加盟園への学びの還元（研修など）

△書籍出版（例：26次PJなど）

プロジェクト参加者の声

「プロジェクトでは、たくさんの園の先生と研究する中で、様々な考え方、保育に触れることができました。研究に関する口頭発表をすることで、自分なりに理解を深めることができました」（26次）

「5歳児の育ちについて、様々な視点で考えることができました。他園の取り組みや、保育のねらいを知ることができ、自園で実践し、子どもの成長を実感することができたことがとてもよかったです」（28次）

「保育の可視化の重要性を他園の事例や講師の先生の助言から学ぶことができ、それを生かして園のドキュメンテーションや、保護者への発信に生かすことができました」（29次）

学び続ける保育者として

＊理論と実践がつながる

＊他園の保育者や他園の実践がつながる

＊新たな知識・考え方を講師/助言者の先生から学ぶ

＊アウトプットする中で、実践を振り返る